**溶連菌（ようれんきん）感染症について**

◎どんな症状がでるのか？

　発熱・のどの痛み・頭痛・発疹（赤く細かい粟粒のような）が主な症状です。他に腹痛・嘔吐・下痢・咳・眼の充血・舌の赤いブツブツ（苺のような）・首のリンパ節の腫れなどがあります。また症状がおさまった頃に指の皮がむけたりすることがあります。

◎診断は？

私たち小児科医は、症状やのどの様子で見当がつくことも多いのですが、正確にはのどの分泌物を綿棒でこすりとり溶連菌がいるかどうかを調べて診断をつけます。ただし検査をする前に抗生物質（菌を殺す薬）を飲んでいたりして、調べても菌が見つからないこともありますが、症状がそろっていれば溶連菌感染症と考えたほうが良いと思われます。他に血液を採って調べる方法もありますが、間隔をおいて２回調べなければなりません。

◎溶連菌感染症が問題になるのはなぜ？

重大な合併症があるからです。

溶連菌自体によっても中耳炎・肺炎など合併症がおきますが、ここで問題にしている合併症とは急性腎炎やリウマチ熱のことです。これらはいったん症状がおさまった後に間隔をおいて起きることが多く、溶連菌に対するからだの反応の結果おきるといわれています。そして症状の強さとは一致しないといわれていますので、軽くすんだからといって甘く考えてはいけません。

◎どうしたらよいか？

まずきちんと薬を飲むことが第一です。先に書きましたように、治療の目的は扁桃腺や咽頭炎をなおすと同時に、そこから溶連菌を除去して急性腎炎やリウマチ熱が起こるのを防ぐことにあります。さいわい溶連菌は抗生物質がよく効きますので10～14日間しっかりと飲むことが必要です。症状がなくなると忘れがちですが、後で合併症が起こって悔やまないためにきちんと飲んでください。また尿の検査をしておくことも大切です。

また人にうつる病気ですので、症状がおさまるまで幼稚園や学校などの集団生活は休むことが必要です。兄弟がいるときには一緒に菌の検査をうけた方が良いでしょう。